

水菜のように

村井秋

日脚伸びやや湿りたる手触りも

梅雨明けて白い洋服直しおり

探梅や散骨するように来てしまい

きょうだいはすぐ寄ってくる赤とんぼ

三寒四温雑音を拾います

昼の虫わたしを黄身にしてしまう

猫柳ゆつくり話す人集合

秋晴やパンツのゴムが切れました

愛車に乗って水菜のようにひとりかな

糸付いた十一月の上着かな

耳に胼胝おやじのペースね猫柳

作務僧の山水に溶け十一月

三月や行きたい見たい離れたい

葱きざむ時さびしい顔が寄ってくる

霾つちかふるやしきりに痒い耳を出し

日は急に傾きやすきラグビー場

春疾風カバーの黒い広辞苑

泣いた跡があるさくら照葉かな

轉りやきれいに剥がす包装紙

追悼の霧中を走る列車かな

さようならが自然に言えて春シヨール

笹鳴やいつしよに居たいときに居る

廢屋は大地に生えて花大根

冬の虹黒い能率手帳もち

夫の留守目高のごとき軽さかな

気付かせてくれる人ゐて冬葦

つばくろや北鎌倉を一系列に

はつとするやさしさであり冬葇薇ふゆそうび

痛む日はそつと遠くに卯の花が咲く

母の肖像しづかにかたし寒の入り

気ままなる読書ノートは夜濯きなり

鼻といつしよに見てる写真展

うつ伏せて髪の吹かるる合歓の花

さくら

咲き盛る桜の幹をさすりつつ花はまだかと盲は聞くも 森不治男  
桜など咲かば癒えめと人も云ひ吾も思へり思ひつつ病む 平鍋狂瀟

桜は、昔から日本人の精神性と深くつながってきました。

右の歌はハンセン病療養所で詠まれた歌です。盲人には、実際には桜を見ることが出来ませんが、桜が咲いていると思うだけで心のなかが明るくなるのかもしれない。前者は、満開の桜であることを知らない盲の哀しさに同情を寄せて詠まれています。後者は、桜が咲いたら少しは慰められるだろうと心待ちしているものでしょう。

もろともにあわれと思え山桜花より外に知る人そなき 詠み人知らず

山桜の楚々と咲くさまは、こちらの息が止ってしまいそうなほど、はつとする気高い美しさがあります。深山にあつては、人に見られることもなく、その美しさを讃えられることもなく、泰然と咲きそして散つてゆきます。

ハンセン病で隔離された人々は、自分たちもこの「山桜」のように、垣根の内の人知れず美しく生きたいと、この歌からとつて、全生病院の園誌は、「山桜」と名付けられました。